

福岡大学病院歯科口腔外科における病理組織検査の統計的検討； 1998年1月1日から2008年12月31日まで

臼杵雄一郎 福田 浩子 古田 治彦
瀬戸 美夏 梅本 丈二 高橋 宏昌
青柳 直子 北嶋 哲郎 喜多 涼介
喜久田利弘

福岡大学医学部医学科歯科口腔外科学

要旨：歯科口腔外科において病理組織診断は確定診断とその評価を行う上で非常に重要である。今回、当科で採取された病理組織検査症例について経年的に統計検索を行い検討した。対象は1998年1月1日から2008年12月31日の11年間、1,217例（男性582例，女性635例）で，平均年齢は 48.3 ± 22.6 歳であり20代と60代にピークが見られる二峰性を示していた。男女比は1：1.09であった。経年的に総症例数は漸次増加傾向にあり2008年にほぼ倍増していた。分類別でも同様の傾向が腫瘍性病変と炎症性病変に見られた。病理診断結果は腫瘍性病変，嚢胞性病変と炎症性病変に3分類しそれを更に細分類化した。分類別の割合は炎症性病変が42.6%（518例）を占め，嚢胞性病変が31.5%（383例），腫瘍性病変が26.0%（316例）と続いていた。また，その特徴として腫瘍性病変では非歯原性良性腫瘍がその75%（237/316）を占め，歯肉粘膜の良性腫瘍病変が比較的多いと言えた。嚢胞性病変については歯原性嚢胞では radicular cyst が74%（154/208）を占め特に当科ではその割合が大きくなっていると言える。非歯原性嚢胞では粘液貯留嚢胞（mucocele）が68%（119/175）を占めていた。炎症性病変では chronic inflammatory（granulation） tissue が47%（237/518）を占め，次に Sjögren's syndrome が23%（120/518），epulis 6.3%（33/518）と続いていた。この結果より当科で治療を行っている疾患の病理組織学的傾向が明らかにできた。

キーワード：病理組織診断，腫瘍性疾患，嚢胞性疾患，炎症性疾患，統計